

政治向きというかどちらかというところギラギラした話が多かったので、少々目を転じて地域の話題を採り上げたい。

1 鬼鹿毛伝承

新座の大和田は川越街道 6 つの宿場のうちの中間的な場所にあって当時は大いに賑わった。旧川越街道、新座駅入り口から大和田地区へ下る道の途中に「鬼鹿毛の馬頭観音」が鎮座している。



(鬼鹿毛馬頭観音)

新座市教育委員会が平成 3 年 1 2 月に設置した説明版「鬼鹿毛の馬頭観音」には、次のように記されている。

「昔、秩父の小栗という人、江戸に急用があつて、愛馬鬼鹿毛に乗り、道を急ぎました。大和田宿に入ると、流石の鬼鹿毛にも疲れが見え、この場所にあつて松の大木の根につまづきました。

しかし、さすがは名馬、直ちに起き上がり主人を目的地まで届けたといひます。所要を終えた主人が先ほど馬をとめたところまで戻ると、いるはずの鬼鹿毛の姿が見えませんが、不思議に思ひましたが、仕方なく家路を急ぎました。

やがて、大和田の地にさしかかると、往路愛馬が倒れた場所に鬼鹿毛の亡がらを見つけました。鬼鹿毛は主人の急を知り亡霊となつて走り続けたのでした。

村人は、のちに鬼鹿毛の霊を弔つて馬頭観音を建てたといひます。これが〔鬼鹿毛の伝説〕です。

鬼鹿毛の馬頭観音は、元禄九年（1696）に建立され、市内では最古・最大の石造の馬頭観音です。

像高は、約 127 センチメートルで、三面六臂（3 つの顔と 6 つのひじ）の丸彫立像です。」

百科事典によれば、馬頭観音は、仏教における信仰対象である菩薩の一つである。サンスクリットでは、「馬の頭をもつもの」の意である。観音菩薩の化身（へんげしん）の一つであり、六観音の一つにも数えられている。日本語では「馬頭観音菩薩」、「馬頭観世音菩薩」、「馬頭明王」などさまざまな呼称がある。衆生の無智・煩惱を排除し、諸悪を毀壊する菩薩である。馬頭観音のみは目尻を吊り上げ、怒髪天を衝き、牙を剥き出した忿怒（ふんぬ）相である。本来は馬頭人身の像容であつたが、日本には伝えられていない。また「馬頭」という名称のゆえか、あらゆる畜生類を救う観音であるとも言う。

近世以降は、馬が急死した路傍などに馬頭観音像を建てることが多くなつた。この場合、像ではなく単なる石碑であつたりする。

2 鎮守様（須賀神社）のお祭

小生が住んでいる新座市畑中地区の鎮守様は、「須賀神社」である。然しながら、氏子でもなく、地域に長く住んでいる訳ではないので、それほどの親しみがある訳ではない。が、新年が明けると同時に初詣に行くのは矢張り須賀神社であり、昨年は神輿も担がせてもらった。須賀神社の縁起について、地元の峯岸氏から貴重な資料を頂いたので、それを紹介したい。

『須賀神社の縁起』

畑中 2 丁目東福寺の南側にある須賀神社は、もと畑中 1 丁目地内にあったものを明治初期に今の場所へ移転したものと伝えられている。

祭った年代は、不詳ですが、江戸時代の初期と推定される。この地方は古くは沼袋、畑中、大下の 3 つの部落からなり、村三役つまり名主、組頭、百姓代で行政運営をしていた。

江戸時代の開拓農民達の手により神社が建てられ五穀豊穰を祈念したのである。神社の左側の祭神は、田別命(ほんだわけのみこと)(第 15 代応神天皇)であり、右側の祭神は、「おいぬさま」つまり今の青梅市にある御岳神社で大日直神(おおぐちちよくじん)が祀られています。「神輿」は応神天皇つまり天皇様と呼んでいる。

明治大正の頃子供用の輿が作られた。これは御岳神社の祭神大日直神の神使が狼と言うことで厄難を祓い落とす意味で作られたものと謂われる。またこの神輿は氏子の家の長男だけしか担ぐことが出来なかったのである。

神社の右側に古木の松がある。これは「青座の松」と言って神社の隣の百姓並木清左衛門が近くの山林から赤松の苗を持ってきて植えたもので現在も猶枝を張り栄えている。(並木邦光氏寄稿)』



(地区を練り歩く須賀神社の神輿 7 月 9 日。尚、右下隅の女の子二人は小生の孫たちです)